

幕末明治の写真師列伝 第四百四十八回 名古屋の初期の写真師たち その一

名古屋の初期の営業写真館や写真師たちの歴史を語る上で、基本となる参考資料は、やはり名古屋写真師会、後藤順男編『名古屋写真師会小史』（名古屋写真師会、平成2年）となる。この本に「座談会「営業写真思い出話抄」として、「愛知県の中では名古屋の写真屋が一番古いであろう。川村（一宮に行った）、東蘭、中村透、高村、宮本、大橋があった。」大須観音周辺には未だ商家がバラバラとしかなかった。濃尾地震後の日清戦争の頃は非常に忙しかった。この頃写真屋が始まったと考えていいだろう。宮下が誰に倣ったかわからん。」と語られているが、宮下欽は横山松三郎の弟子なので、これは今でははっきりしている。では、名古屋で一番最初の写真師は誰かといえば、これは、明治4年に大傳馬町4丁目で営業していた玉井房次郎であろう。このことは明治4年の名古屋新聞第1号での辛羊乃松冬、林家正三述と著された新聞附録「名越各業案内」に写真師玉井房次郎の名があることで判る。但し、玉井房次郎が誰から写真術を学んだのかは不明人物と思われるので、玉井房次郎が誰から写真術を学んだか、その後すぐに洋物小間物商になってしまったのはどういうわけなのか？は、今後の写真史研究者の課題となる。「名越各業案内」には、大傳馬町4丁目に同じ人物と思われる「舶来物仕入所砂糖上商玉井屋宇兵衛」の名がある。その他には洋学を基礎から学んでいた初期の写真師として藤蘭一という人がいる。この人は美濃の久世治作の弟子で、高村六之助から写真術を学んだと思われるが、早川徳三郎『大須繁盛記』によれば、高村六之助、藤蘭一は、明治10年に大須観音門前で、開業していたようだ。明治8年には下岡蓮杖の弟子で岡本圭三が名古屋で開業。ついで明治12年に開業したのが宮下欽。明治になって大須観音の周辺には商家も多くなり、この辺りに営業写真館も多くできた。高村六之助の弟子が水谷鏗太郎（鏡）、鋳次郎の兄弟で、この二人は、尾張藩士水谷音次郎の息子である。水谷兄弟は二王門通りから浅間神社境内、浪越公園に向かう路地の道の向かい合わせに仲良く写真館を営んでいた。この辺りは写真館も多く、青山一郎の写真や海部之進、近藤、野田、大橋、佐藤、中村（尾張横須賀の代官をしていた）の子供で、透の写真館などの写真館があった。大須観音の近くには加藤稔の写真館が最初あったが、今はすぐ近くに移転して現在も営業している。詳細は岡戸武平著『中京の写真界99年横井吉助三代の歩み』（昭和47年、横井吉助商店）にある「明治30年頃の大須公園写真館分布図」をご覧頂きたい。水谷兄弟も宮下欽と名古屋の同じハリストス教会の信者であったことから、宮下欽との交流もあった。このことはアセット婦人画報社編『美しいキモノ』（2009年春号～2010年冬号）所収山下悦子がつづる「セピア色の写真が語る明治・大正・昭和の服装史ある市井の一族の物語」（全8回）にも書かれている。

※今月号より新しいシリーズが始まります。

（森重和雄）